Osaka University Knowledge Archive

Title	関係代名詞と文法化
Author(s)	米倉, よう子
Citation	Osaka Literary Review. 2004, 43, p. 31-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25193
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

関係代名詞と文法化

米倉　よう子

1．はじめに

本稿では関係節（relative clause, 以下 RC）に見られる文法化プロセスについて考察する。ただし明示的先行詞を伴う関係代名詞構造を中心に扱い、関係副詞節や独立関係詞節には基本的に触れない。英語では、RC は先行詞（antecedent）とそれに続く節（以下、S_{rel}）から成る。関係代名詞は省略されることもあるので、S_{rel} に含まれているとは見なさず、別に RPro として表記する。原則として英語では、先行詞と S_{rel} の間に RPro が現れる。非制限関係節（non-restrictive relative clause, 以下 NRRC）では RPro は省略できないが、制限関係節（restrictive relative clause, 以下 RRC）には RPro が現れない例も見られる。即ち、

(1) NRRC/RRC = antecedent + (RPro) + S_{rel}

と表わすことができる。指示詞・疑問詞は RPro のソースとなりやすいことが既に指摘されている（Keenan 1985: 149）。では、これらのソースに共通の意味基盤は何だろうか。また一般に NRRC は hypotaxis 構造、RRC は subordination 構造とされ、前者から後者が発達すると考えられているが、Harris & Campbell（1995）はこの説は言語変化メカニズムを何ら明らかにしないと批判する。RC の発達はどのように説明されるべきなのだろうか。

2．先行研究

2.1 指示代名詞と関係代名詞

節と節の関係に関わる文法化としては、次のようなパスが提案されている。

(2) parataxis > hypotaxis > subordination
− dependent + dependet + dependent
− embedded − embedded + embedded
(Hopper & Traugott 2003: 178)

大まかに分けると、RC のうち RRC は [+embedded] 特性を持ち subordination, NRRC は hypotaxis の様相を呈す (cf. Hopper & Traugott 2003)。

通言語的に見て、指示詞と疑問詞は RPro のソースとなりやすい (Keenan 1985: 149)。例えば OE では、(2) のクラインにおける hypotaxis 構造で RPro に似た働きをしたものに指示代名詞 se/seo/þæt があった。O'Neil (1977) は RC 発達と話題化 (topicalization) との関係を指摘する。O'Neil によれば、RPro 以下の部分は元々付加部 (adjunct) で、topicalization を通して主節に組み込まれたと言う。se-S_{rel} 構造は元来独立節 (independent clause) だったと考えると、多くの se-S_{rel} 構造に V2 語順が見られることをうまく説明できる (Fischer et al. 2000: 56)。また、OE で関係代名詞の働きをしたものとしては、既述の指示代名詞 se 系の他、不変化詞 þe も利用されたが、þe も se と同じく、直示マーカー (deictic marker) 起源である (Fischer 1992: 293)。OE の RRC では se (または複合系 se þe) よりも þe が用いられた (Traugott 1992: 227)。þe は縮約フォーム (reduced form) を持ち、屈折できないという点で、se などの指示代名詞より文法化が進んでいる (Hopper & Traugott 2003: 202) と想定すると、直示マーカー起源の RPro を含む RC は、hypotaxis 構造の NRRC から subordinate 構造の RRC へと発達したと考えられる。

2.2. 疑問代名詞と関係代名詞

RPro のもう一つのソースとしてよく挙げられる疑問詞についても、指示詞由来の RPro 同様、NRRC から RRC へと広まったと一般に考えられている。[1] また、Rissanen (1999: 293) は、RPro と先行詞間のリンクの結合度には段階性があるとし、wh 系の広がりについては 'continuative' という non-restrictive の特殊タイプを区別するとよいと述べている。

(3) How now Perrott (quoth the Kinge) what is the Matter that you make this great Moane? **To whom** Sir John Perrott answered ... ([HC] Perrott 33; Rissanen 1999: 292)[2]

このタイプでは、2つの節が subordinating 関係というよりは coordinating 関係になっている。

これに対して Harris & Campbell (1995: Chapter 10) は、全ての従属節 (subordinate clause) が独立節 (independent clause) に起源を持つとはいえないとし、wh 語由来の関係代名詞は RRC から NRRC へと広がったと主張する。以下では彼らの主張を概観する。

Harris & Campbell (1995: Chapter 10) は (speaker) assertion という概念を主張の根拠として使用する。speaker assertion は「ある命題の真理にコミットすること」と定義される。彼らはまず、様々な疑問詞が通言語的に subordinator として使用されていることを指摘する。例えば (4) はグルジア語からの例で、ray-ta-mca "that" は ray "what" から派生した。

(4) da ara unda, **raytamca** icna vin
and not he.want that he.know someone
"and he did not want that anyone know"
(Mark 9:30Ad.; Harris & Campbell 1995: 298)

Harris & Campbell は、基本的に従属節は speaker assertion を含まない

と説明する。(5a) のような NRRC は、(5b) (5c) のような命題真理へのコミットメントを表わす。

(5) a. this car, which I only rarely drove, is in excellent condition
b. I only rarely drove this car
c. this car is in excellent condition
(Harris & Campbell 1995: 301)

一方、RRC については、先行詞名詞の冠詞の種類によって presupposition か assertion かが変わって来るという。定冠詞付き先行詞を持つ (6a) の場合、(6b) が前提とされている。

(6) a. the man who's wearing a party hat is my uncle
b. a man is wearing a party hat
(Harris & Campbell 1995: 301)

不定冠詞付き先行詞名詞を持つ (7a) では、(7b) (7c) が 'assert' される。

(7) a. I know a girl who speaks Basque.
b. a girl speaks Basque
c. I know a girl (Harris & Campbell 1995: 302)

assertion をあらわさないと言う点で疑問文は従属節と同じであると Harris & Campbell らは主張する。ここから「疑問詞は non-assertion マーキングであり、同じく non-assertion を表わす傾向にある従属節をマークする機能へと広がった」と仮説をたてる。これに基づくと、question-marking device はまず、non-assertion である従属節マーキングへと広がり、それから speaker assertion を表わす従属節へと拡張することになる。RC に当てはめて考えてみると、(8) のように wh 語が広まるはずである (p. 305)。

(8) RRC (with definite heads) > NRRC

以上、Harris & Campbell (1995) の主張を概観したが、この主張には問題点が残されている。NRRC は命題へのコミットメントを表わし、assertion であると主張する一方で、彼らは (9) のような条件を表わす副詞節は non-assertion であると考えている (p. 304)。

(9) if you (had) won the lottery, the yard would be swarming with reporters (Harris & Campbell 1995: 302)

では、(10) の太字部の NRRC は、どのように解釈されるのだろうか。

(10) .... **Another man, who finds his host especially irritating,** will likewise suppress his hostile facial expressions, and **a third, who feels unduly intimidated by his impressive companion,** will permit his face to break out into an expression of naked anxiety. (Morris, 6; 長原 1990: 25)

(10) の一つ目の NRRC は "another man, if he finds ..." のように、副詞節的に解釈される (長原 1990: 25)。Harris & Campbell の NRRC の説明によれば、"another man finds his host especially irritating" という命題へのコミットメントが表わされているはずだが、意味的には条件副詞節 (if 節) と同じ働きをしていることを考慮に入れると、NRRC は等しく assertion であると言う彼等の主張は柔軟性にかけると言わざるをえない。

2.3 Wh 詞と指示代名詞の共通点

ここで、wh 疑問詞の特性を考えてみよう。Lambrecht & Michaelis (1998: 513) はバスク語の例を挙げ、焦点構成素と wh 疑問文における疑問詞が同じ位置に来ることから、疑問詞を焦点要素 (focus) と見做しても

差し支えがないと指摘する (11) (12)。

(11) Bonba **Mikelek** egin zuen.
Bomb-the. SG. A Micael. E make.PERF AUX.PAST
"MICHAEL made the bomb."
(Lambrecht & Michaelis 1998: 511)

(12) Bonba **nork** egin zuen.
Bomb-the. SG. A who. E make. PERF AUX. PAST
"Who made the bomb?" (Lambrecht & Michaelis 1998: 512)

ここで，関係節部は元々付加部で、'topicalization' を通して主節に組み込まれたとする O'Neil (1977) の主張を思い出してみよう。topic-focus は相対する概念のようだが、同時に密接した概念でもある (Deane 1991: 40)。そもそも topicalization という用語で表わされる現象には 2 種類あることが知られている。即ち話題要素の話題化 (topic topicalization) と焦点要素の話題化 (focus topicalization) である。

(13) a. What about John?
b. John, he CALLED.

(14) a. Who did he call?
b. JOHN, he called.

(13b) では、既に話題となっている John を文頭に置いて、談話の流れを整えているのに対して、(14b) では焦点要素を文頭に置くことによって強調効果をねらっていると考えることができる。このように、同じ統語構造が topic 構文としても focus 構文としても使用されている例は他にも見つかる。ブルターニュ語やアイルランド語では focus 構文が分裂文を起源に持つ。(15) は 17 世紀後期ブルターニュ語の例で Jesus が焦点要素となっている。

(15) **Jesus** a　so　quen truheus
Jesus that is. REL so merciful
"JESUS is so merciful"
(*Christmas hymns in the Vannes dialect of Breton* 137;
Harris & Campbell 1995: 156)

一方、カルトベリ語 Laz 方言では分裂文がむしろ topic 構文として利用される (Harris & Campbell 1995: 165-166)。

(16) mažura-pe-na　en,　va　uc'umess
second-PL.NOM-COMP it.be NEG he.speak.to.them
Lit.: "The others that are, he does not speak to [them]."
"As for the others, he does not speak to them."
(Čikobava 1936b: 32, 19; cited in
Harris & Campbell 1995: 165)

中尾・児馬 (1990: 59) は、RRC 成立には次のような段階があったと述べる。

(17) a. [... N_i ...] S_1 [... N_i ...] S_2
b. [... N_i ...] S_1 [... *se* ...] S_2
c. [... N_i ...] S_1 [*se* ...] S_2
d. [... N_i [*se* ...] S_2 ...] S_1
(S は文、N_i は同一人／物を指示する名詞を示す)

同一物・人を指示する名詞を含んだ 2 つの (比較的) 独立した文 (a) が出発点で、繰り返しを避けるため指示詞が導入され (b)、これが最終的には先行詞の一部として組み込まれる (d)。また、二つめの節にこの指示代名詞 (=se /seo/**þ**æt) が現れると、「文体的に繰り返し、あるいは強調の効果があった

はず」だと言う（中尾・児馬 1990: 59）。実際、強調詞と指示詞との関連を示唆する言語現象は他にもある。例えば、ラテン語強調詞 ipse はロマンス言語において指示詞へと発達した（例：スペイン語 *ese*）（König & Siemund 1999: 252）。強調詞の特性の一つに選択可能代替物（alternatives）の集合体を喚起するという機能がある（König & Siemund 1999: 239）。例えば（18）では、Bill Clinton 以外の政府関係者が「周辺部」に位置する alternatives として喚起されている。

（18）Bill Clinton **himself** will sign the document.

（König & Siemund 1999: 240）

以上の議論を踏まえて、指示詞と疑問詞（wh 語）の共通機能を考えてみよう。wh 疑問詞は、'a range of alternatives' を前提とし、その中の一部をプロファイルすることにより指すという点で一種の直示表現であり（Langacker 1991: 505）、「alternatives の集合体の存在を喚起する」と言う点では強調詞的性質を持つ。また、英語の wh 疑問詞由来 RPro の発達でも、強調詞と関連する段階が見られる。wh- セットの RPro の発達は、間接疑問文に起こる疑問詞を出発点とし、それが複合関係詞に、さらに先行詞を要求する関係詞へと発達したと考えられている（小野・中尾 1980: 339）。

（19）**Who** steals my purse steals trash;

（1604 Sh *OTH* 3.3.157; 宇賀治 2000: 254）

Fischer（1992: 300）は「先行詞を伴う RC 発達の手がかりとなったかもしれない例」として、（20）を挙げる。

（20）hwam mai **he** luue treweliche **hwa** ne luues his broðer.
"whom can he love truly, who (ever) does not love his brother"

(*Wooing Lord* (Tit) 238-40; Fischer 1992: 300)

Fischer は「wh フォームの機能がシフトすると、この節が非制限関係節へと変化したと考えられる」と述べているが、wh 疑問詞の機能が何から何へとシフトしたのかについては言及がない。(19) (20) の who は現代英語の whoever に相当すると解釈できるが、これは量の尺度上での総称的性質を喚起する。ただし単なる全称量化子ではなく、文脈に合った尺度を提示することにより、談話参加者に対し選択可能性空間を喚起するものである。この点で、「alternatives の集合体を喚起する」という強調詞と同じ効果を持つ。

以上の議論をまとめると、関係代名詞のソースとなる指示詞・疑問詞には、「直示的機能」「強調詞的機能」が共通の意味基盤として含まれていると考えられる。

3. Dependency Analysis

RRC の先行詞は、冠詞等のグラウンディング要素を含まない nominal head である。RRC の RPro の先行詞が full nominal でないことは、固有名詞や代名詞が先行詞として使用できないことからも分かる (Davidse 2000: 1107-1114)。このような RRC 分析を Davidse (2000) は依存分析 (dependency analysis) と呼ぶ。

長原 (1990: 21-22) は、NRRC の RPro とその先行詞の関係を、人称代名詞あるいは指示代名詞としての関係代名詞とその先行詞との関係と見なしている。例えば、any, all, every, no, which などの数量詞に導かれた名詞 (句) については RRC は可能だが、NRRC は原則として不可能である。この制限は、代名詞とその先行詞の関係と同じであるという。

(21) ***Any**/***Every** man is insane, and **he** drives a Cadillac.

(Jackendoff 1977: 176)

長原（1990）の主張に従い、NRRC では RPro の指示代名詞・人称代名詞的機能により「先行詞－RPro」リンクが保障されると想定してみよう。代名詞の役割の一つは先行名詞を 'rehearse'（繰り返し述べる）すること（Rissanenn 1999: 605）なので、NRRC の先行詞と RPro は「同一のものを別々の表現形式で表わす」といえる。[3] NRRC から RRC への変化はどのように捉えられるのだろうか。参考になるのは、Harris & Campbell（1995）による次の指摘である。

(22) In most instances, TAM (=tense-aspect-modal) is marked only once in the verb complex; cross-linguistically it is unusual for TAM to be indicated redundantly in a monoclausal structure. (Harris & Campbell 1995: 179)

TAM のうち、時制・法は定型節に関するグラウンディング要素である（Langacker 1993）。2つの節が単一節へ統合されると、出来上がる単一節にはグラウンディング要素が冗長的に現れないことを（22）は示唆する。グラウンディング要素が2つある構造は単一節的（monoclausal）とは言えず、二元節的（biclausal）である。この主張に従い、まずは英語 that 節補部の発達を見てみよう。OED によれば、that 節補部は（23）から（27）のように発達したと考えられている。

(23) He once lived here: we all know **that**.
(24) **That** we all know: he once lived here.
(25) We all know **that**: he once lived here.
(26) We all know **that** he once lived here.
(27) We all know he once lived here. (*OED* s. v. that *conj.*)

（23）から（25）までは that は指示代名詞で、（26）で接続不変化詞（conjunctive particle）となり、最終的には（27）のように省略可能となる。こ

の時点で 'he once lived here' は 'we know' の直接目的語として現れるとOED は主張する。動詞の直接目的語として現れうるということは、名詞的性質を帯びるということであり、これは (28) の Langacker からの引用に見られるように、complementizer は atemporal な、そして名詞的解釈すら課すという見解にも合致する。

(28) For this reason complementizers are plausibly analyzed as imposing an atemporal, **perhaps even a nominal construal on the structures** they combine with. (Langacker 1991: 440)

また、名詞的解釈を得るということは、言い換えれば定型節・動詞的特性が減少するということである。

(29) In terms of profiling, **nominalization** represents the greatest departure from **the processual nature of a verb or a clause.** (Langacker 1991: 423)

(30) の Langacker からの引用に見られるように、「動詞的特性」には定型節に関するグラウンディング化が含まれていると考えると、complementizer と結び付く定型節は一種の名詞化をうけ、グランディング要素が脱落するという解釈が課されることになる。

(30) Presumably it (=verbal character) finds **optimal manifestation** in a finite clause, which designates **a grounded instance of a process type.** (Langacker 1991: 420)

Harris & Campbell は定型節の統合について述べていたが、定型節結合と並行的に、RC の「先行詞－RPro」リンクも biphrasal から monophrasal へと発達すると考えてみよう。NRRC の「先行詞－RPro」リンクは同じものを表わす 2 つの full nominal が併置された構造で、その各々が独自の

（名詞類に関する）グラウンディングを受ける表現である。「RC の先行詞－RPro リンクも biphrasal から monophrasal へと発達する」という先ほどの想定に基づくと、関係節構造はこのグラウンディング要素が冗長的でない構造へと発達すると考えられる。従って、制限節関係代名詞の先行詞が full NP ではなく、冠詞類を含まない nominal head であることは自然な成り行きと言える。ここで (31) を考えてみよう。

(31) a. The one who lived in the paper bag was very arrogant.
b. *The one, who was very arrogant, was hated by his neighbors. (Lambrecht 1988: 324)

the one は自律的には現れることができないので、(31b) の NRRC は不可である。しかし RRC で使用されると、(31a) のように容認可能となる。(31a) のように先行詞が具象的な意味全体を S_{rel} から得る場合、先行詞と RPro のリンクは強いと考えられると Rissanen (1999: 294) は述べている。(31a) では、先行詞 (the one) は非常にスキーマ的な概念を提供するだけであり、詳細な意味は後続の S_{rel} から得られることになる。この点で、the one は実質的にほとんどグラウンディング要素を提供するだけの働きしかしていないと主張しても、事実からそう遠く離れてはいないだろう。

4．結論

以上、本稿では、RC の発達を考察した。RPro のソース（指示代名詞・疑問代名詞）には、強調詞的機能という共通の意味基盤があり、また、非制限節から制限節へと移行する際の「biphrasal 構造＞ monophrasala 構造」は、Harris & Campbell (1995) の主張する「biclausal 構造＞monoclausal 構造」と平行的であることを論じた。

注

1 例えば Fischer (1992: 300) は、英語では「もっとも初期の wh-form relative は原則として NRRC で見つかる」と述べている。
2 原則として、本稿の引用例文中の太字強調は筆者によるものである。
3 同格表現では、同じモノを指すが記述の仕方が異なる 2 つの nominal が単に並べられているだけでなく、それらがより高次の一つの nominal を形成している (Langacker 1991: 432)。

参考文献

Davidse, Kristin. 2000. "A Constructional Approach to Clefts." *Linguistics* 38-6: 1101-1131.

Deane, Paul. 1991. "Limits to Attention: A Cognitive Theory of Island Phenomena." *Cognitive Linguistics* 2-1: 1-63.

Fischer, Olga. 1992. "Syntax." In *The Cambridge History of the English Language: Volume II 1066-1476,* ed. Norman Blake, 207-408. Cambridge: Cambridge University Press.

Fischer, Olga, Ans van Kamenade, Willem Koopman, and Wim van der Wurff. 2000. *The Syntax of Early English.* Cambridge: Cambridge University Press.

Harris, Alice C., and Lyle Campbell. 1995. *Historical Syntax in Cross-linguistic Perspective.* Cambridge: Cambridge University Press.

Hopper, Paul J., and Elizabeth Closs Traugott. 2003. *Grammaticalization.* Cambridge: Cambridge University Press.

Jackendoff, Ray. 1977. *X-bar Syntax: A Study of Phrase Structure.* Massachusetts: MIT Press.

Keenan, Edward L. 1985. "Relative Clauses." In *Language Typology and Syntactic Description, Vol. II: Complex Constructions,* ed. Timothy Shopen, 141-170. Cambridge: Cambridge University Press.

König, Ekkehard, and Peter Siemund. 1999. "Intensifiers as Targets and Sources of Semantic Change." In *Historical Semantics* and *Cognition,* eds. Andreas Blank and Peter Koch, 237-257. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

Lambrecht, Knud. 1988. "There was a Farmer Had a Dog: Syntactic Amalgams Revisited." *BLS* 14: 319-339.

Lambrecht, Knud, and Laura A. Michaelis. 1998. "Sentence Accent in Information Questions: Default and Projection." *Linguistics and Philosophy* 21-5: 477-544.

Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. II: Descriptive Application.* Stanford and California: Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1993. "Deixis and Subjectivity." In *New Horizons in Functional Linguistics,* eds. S. K. Verma and V. Prakasam, 43-58. Hyderabad: Booklinks Corporation.

中尾 俊夫・児馬　修. 1990. 『歴史的にさぐる現代の英文法』. 東京：大修館書店.

長原 幸雄. 1990. 『関係節』. 東京：大修館書店.

小野　茂・中尾　俊夫. 1980. 『英語史 I』. 東京：大修館書店.

Rissanen, Matti. 1999. "Syntax." In *The Cambridge History of the English Language: Volume III 1476-1776,* ed. Roger Lass, 187-331. Cambridge: Cambridge University Press.

Simpson, J. A., and E. S. C. Weiner. prepared. 1989. *The Oxford English Dictionary.* 2nd ed. on CD-ROM. Oxford: Clarendon Press. [OED]

Traugott, Elizabeth Closs. 1992. "Syntax." In *The Cambridge History of the English Language, Vol I: The Beginnings to 1066,* ed. Richard M. Hogg, 168-289. Cambridge: Cambridge University Press.

宇賀治 正朋. 2000. 『英語史』. 東京：開拓社.